



木の社長
佐藤大作
 vol.5
 佐藤大作 × 名参謀
物語

ラストサムライ

大作社長の個性ばかりが際立って見える大建だが、実際に家づくりの打ち合わせを見ると、中のスタッフもかなり個性的だ。中でも設計全般を仕切る中村専務は、いぶし銀の輝きを持つ名参謀である。まるで竹中半兵衛や山本勘介のような戦国時代の名軍師を思わせるところに、施主様の間では「ラストサムライ」と称され信頼を得ているようだ。

つて、専務のさらに上を行くために猛勉強したもんだ。おっと、専務！だが？」

中村「はい。ああ、どうもいつもお世話になっております」

ゆつくり桐の椅子に座るしぐさを見ても、落ちついていて物腰の柔らかそうな雰囲気のある人物だ。

それについて、談笑をする中でも目の奥には鋭いものを感じるあたりが、職人に通ずる「こだわり」や「信念の強さ」がうかがえる。ああ、やっぱりこの人も大作社長と同じ匂いがする。大作社長とは年齢差30歳以上の凸凹コンビ。大作社長が「動」なら中村専務はまさに「静」。今号の誌面用に

撮影をお願いすると

中村「写真？駄目です。そういう人間では無いですから遠慮させてください」

大作「ほれ、頑固だね。これが職人なんだ。仕事に真つぐな人だからね、こんなんだから専務のファンはすごい多いんだよ」

多くの施主様の話を聞いても、大作社長の次に上がってくる名が中村専務だ。何回も要望を聞き、住む側の動線を考慮した最適な間取りを書く。必要とあらば何回でも間取りを書き直してくれる姿には、とことん施主様に向き合う姿勢が見て取れる。

中村「それぞれのご家族で生活スタイルは異なります。ですからアドバイスやご相談には乗らせていただきますが、こちらからの押しつけは一切いたしません。施主様が住む家なのですから」

大作「これが大建の家づくりなんだな。ね、分かるよな。私も含めうちのスタッフ。大工まで、みんな同じ考えだよ」

あらためて、個性派集団をまとめる大作社長の懐の深さと人を動かす術の巧さを感じてしまう。その術を聞いてみると、お

腹をさすりながら

大作「瘦せればって言われてるけど、この大きさが俺の特徴だからなあ。あ、違うが？うははは」

とはぐらかされてしまった。余計に興味を増す結果になったが、これ以上の詮索は野暮だということだろう。

今冬の家選びは、作り手の心の温かさにも触れてみよう

寒い今の時期こそ家の性能が試される次期。天然無垢材の温かさを実感するにはもってこいのシーズンだ。是非、内覧会では、素足で木のぬくもりを試していただきたい。また、内覧会以外でも、大建スタッフに興味を持ったら、山王6丁目にある会社を訪ねてみることをお勧めする。木のぬくもり以外にも感じる温かさがそこにはあるからだ。家も食も作り手への信頼なくして満足は得られない。まずは知ること、出会うこと。あらためて物づくりの原点を見直そう。



1 使い込むほどにアジの出るダイニングテーブル。
 2 ロフトスペースを書斎に。この狭さが逆に落ち着く。
 3 浴室の壁をヒバにすれば、毎日が温泉気分ひたれる。
 4 オーダーメイドも可能な鏡面台は奥さまの好みに合わせれる。
 5 丈夫で水に強いタモの床板。